

## 事業報告書

1 事業名	親子で未来を切り拓く！ 非認知能力を育む学びと対話のワークショップ
2 事業期間	2025年8月～2026年2月
3 事業内容	<p>具体的な内容(いつどこで何を実施したか等) 本事業では、那覇市在住の小中学生とその保護者を対象とした講演会とワークショップを実施した。</p> <p>2025年8月2日(土)10:00～12:00 ワークショップ「未来の街をデザインしよう！～2035年の暮らしを考える～」 場所:なは市民活動支援センター 参加人数:5人 内容:2035年の未来の暮らし(空飛ぶ車や環境を守る街など)を想像し、理想の街をデザインするワークショップ。子どもたちはまず、現在の街の不便な点や課題を振り返り、それを解決するためのアイデアを考えた。その後、LEGOや紙、テープなどの身近な素材を用いて「どこでもついてくる日かげマシーン」のような「こんなものがあつたらいいな」と思うものを形にした。最後は作ったものの名前や動く仕組み、それを導入することで誰が喜ぶのかをまとめ、全員に向けてプレゼンテーションを行った。</p> <p>2025年9月23日(火/祝)14:00～16:00 ワークショップ「〇〇×テクノロジーで新しい道具を考えよう！」 場所:なは市民活動支援センター 参加人数:2人 内容:身近な困りごとをテクノロジーを活用して解決する実践的なワークショップ。子どもたちは、自分や身近な人が困っている場面をたくさん書き出し、その中から解決したい課題を選定した。その後、「MESH(明るさや動きなどの各種センサーと身近なものを組み合わせるツール)」を用いて、課題を解決するための「新しい道具」を実際に制作した。最後は、選んだ困りごとや解決のアイデア、工作で工夫した点などを発表した。</p> <p>2025年10月18日(土)14:00～16:00 ワークショップ「未来の街をデザインしよう！～2035年の暮らしを考える～」 場所:なは市民活動支援センター 参加人数:8人 内容:8月2日開催回と同じ</p>

<p>3 事業内容</p>	<p>2025年11月24日(月/祝)14:00～16:00          ワークショップ「ミライの仕事発見ラボ～まだない職業をつくってみよう!～」          場所:なは市民活動支援センター          参加人数:5人          内容:AIとの共生や宇宙旅行が当たり前になる未来を想像し、そこから必要とされる「まだない仕事」を創り出すワークショップ。かつて存在した仕事(電話交換手や灯台守など)や技術の進歩について学んだ後、レゴを用いたミニクリエイト(お題に合わせた工作)で発想力を高めた。その後、未来の困りごとやワクワクする出来事を想像し、「未来にはどんな仕事が必要になるか」「どんな人を助けたいか」という視点から新しい職業のアイデアを出し、絵や言葉で「未来の仕事カード」として表現して発表した。</p>
	<p>2025年2月22日(日)10:00～12:00          ワークショップ「ミライの仕事発見ラボ～まだない職業をつくってみよう!～」          場所:沖縄県立図書館          参加人数:4人          内容:11月24日の回と同じ</p>
	<p>保護者向け講演会では全ての回で「テストの点だけじゃない「これからの学び」～非認知能力と家庭のかかわり～」をテーマに、国が起業家精神(アントレプレナーシップ)や非認知能力の育成を推進する背景について解説を行った。</p> <p>まず時代背景として、AI(ChatGPTなど)の台頭やDX(デジタルトランスフォーメーション)の浸透、さらにはSociety 5.0やシンギュラリティ(技術的特異点)に向けた急激な社会変化について触れた。このように予測困難な時代においては、「ゼロから生み出す力」や「想定外と向き合い調整する力」、「現実世界を理解し意味づけできる感性や倫理観」といった、AIには代替できない人間ならではの強み(非認知能力)が不可欠になることを説明した。</p> <p>次に、社会の変化に伴う「学びのあり方の転換」について、従来の「学校の学び」と「未来社会での学び」を比較しながら解説した。従来のように「教えてもらった範囲で100点満点を取り、一つの正解を探す」という受動的な学びから、「誰も正解がわからない課題に対して、自らゴールを設定し、他者とコミュニケーションを取りながら最適解を探しにいく」という主体的な学びへシフトしていく必要性をお伝えした。また、国が推進する新しい学習指導要領(生きる力の育成)やSTEAM教育の動向、日本の若者が他国に比べて自身のスキルに自信を持っていない現状などについてもデータを用いて共有した。</p> <p>これらの背景を踏まえ、子どもたちが未来を生き抜くためには、大人が正解を「教えてもらう」環境を与えるだけでなく、「自ら行動し最適解を探しにいく」力を信じて見守るスタンスが必要であることをお伝えし、家庭での新しい関わり方や視点について理解を深めていただく内容となった。</p>

達成目標(事業計画書と連携させる)	目標数値	実績値	達成度(%)
・延べ参加組数	・54組 (毎回90%以上の出席率を目指す)	・24組 (申し込み総数68組)	・44%
・保護者満足度	・満足度90%以上	・94%	・100%
・学生満足度	・満足度90%以上	・100%	・100%
4達成目標と達成度	<p>結果に至る理由、気づき、検証等  <b>【参加組数について(未達の理由と検証)】</b>  延べ参加組数は目標54組に対し実績24組(達成度44%、申し込み総数68組)という結果になった。集客が伸び悩んだ要因として、広報物のメッセージ性が考えられる。保護者アンケートの中に「このワークショップの出口、目的を何としているのかがチラシからはよく分からなくて、ワークショップのあと何に繋がるのかイメージがしにくかった」というご意見があった。「非認知能力の育成」という目に見えにくいテーマであったため、参加することでどのようなメリットが得られるのか、ターゲット層に十分に伝わりきらなかったことが課題として検証された。  また、申し込み総数は68組あったが、実際に参加したのは24組という結果になった。体調不良や引っ越しなどやむを得ない事情でのキャンセルもあったが、連絡が取れない方も多くおり、連絡手段や申し込み手法の見直しも必要だと感じた。</p>		
	<p><b>【満足度について(高評価の理由)】</b>  集客数には課題を残したものの、参加者の満足度は保護者94%、学生100%と非常に高い水準を達成した。その理由は以下の通り。  ・子どもの心理的安全性を担保した運営  保護者アンケートでは、「否定せず無理なく進行していただけた」「ポジティブな言葉で進めていて素敵だった」など、講師のファシリテーションに対する高い評価が多数寄せられました。正解を探すのではなく、自分で決めることを尊重する環境を作れたことが、子どもたちののびのびとした発言や参加意欲に直結した。  ・主体的な学びと新しい気づきの提供  子どもたちは、未来の街や仕事を想像し、「考える」「つくる」「発表する」プロセスを楽しんだ。「仕事がなくなっても新しく仕事ができると知った」といった前向きな感想も得られた。また、保護者に対しても講演会を通じて「非認知能力」や「家庭での関わり方(問いのデザイン)」といった新しい学びを提供でき、親子双方にとって充実した時間となったことが高評価に繋がった。</p>		

<p>5事業の成果</p>	<p>事業を実施したことで得られた結果</p> <p>・対象者に及ぼした影響 【子どもたちへの影響】 未来社会やテクノロジーをテーマにしたワークショップ(「未来の街をデザインしよう!」「ミライの仕事発見ラボ」「〇〇×テクノロジーで新しい道具を考えよう!」)を通じ、「考える」「つくる」「伝える」といった一連のプロセスを主体的に体験した。参加した子どもたちからは、「いろいろ想像して作ることができ、普段できないことを考えることができた」「自分のアイデアを出すのが楽しかった」という声が多く寄せられ、満足度の高い結果となった。また、「未来は予想不可能だけど、想像することはできるので、できることはやっていきたい」「仕事がなくなっても新しく仕事ができる」と知った」「AIに負けないように頑張りたい」といった感想も見られ、社会の変化に対する理解と前向きな姿勢、そして創造力や自己表現力といった非認知能力の確かな成長が見られた。</p> <p>【保護者への影響】 保護者は別会場での講演会において、非認知能力の重要性や子どもの発達特性、家庭での関わり方について理解を深めた。保護者アンケートでは、「正解を探すのではなく、自分で決めることを尊重していただいたことは、子供にとっても貴重な体験だった」「ワークをつづけることで、社会に目を向けて主体的にかかわれるようになる子が育つイメージができた」といった声寄せられた。子どもを否定せず寄り添うファシリテーションが高く評価されており、「知らなかった非認知能力、お家でも考えてみたい」という感想にあるように、家庭内での対話や関わり方に対する意識の変容が促された。</p> <p>・連携機関、協力者に及ぼした影響 本事業の実施にあたっては、なほ市民活動支援センターをはじめ、那覇市教育委員会、那覇市PTA連合会、市内の公民館など、多くの関係機関と連携・協働して広報活動などを行った。このように多様な地域の力を借りて事業を進めたことで、那覇市における子ども・子育て支援の担い手同士がつながる機会を創出することができた。また、行政、学校、地域団体がそれぞれの役割を持って関わったことで、今後の連携事業のモデルとなるような実践知を地域に蓄積することができた。</p> <p>・地域、コミュニティに及ぼした影響 本事業の取り組みは、地域に「親子で共に学ぶ文化」を少しずつ根づかせる第一歩となった。多様な親子が同じ場に集まり共に学ぶ体験は、参加者同士のつながりを生み、孤立しがちな子育て家庭への間接的な支援につながるものである。このような継続的な学びと出会いの場を提供したことは、子育て世代にとって魅力的で参加しやすい「那覇市のまちづくり」に大きく寄与する成果となった。</p>
---------------	---

<p>6次年度以降 の展開</p>	<p>(ビジョンを見据えたうえで次年度以降に予定している展開)      本事業は、単発型の親子ワークショップとして完結しながらも、参加者の前向きな反応や地域団体との連携を通じて、今後の継続・発展の可能性を大いに秘めた取り組みであることが確認できた。次年度以降は、本事業で得られた成果と検証結果を踏まえ、主に以下の2つの方向性で事業を展開していく予定。</p> <p>1. 親子ワークショップの継続・発展と対象地域の拡大      今年度の実施を通して、保護者から「開催回数を増やしてほしい」といった事業の拡大を望む声が多く寄せられました。次年度以降は、今年度のプログラムをさらにブラッシュアップし、シリーズ型やテーマ別の連続講座への発展、あるいは出張型ワークショップとしての展開を視野に入れている。また、那覇市内のみならず、周辺地域への広報・展開も検討し、連携した地域団体とのネットワークを活かしながら、より広範な地域ぐるみで親子の学びを支える仕組みづくりを目指す。</p> <p>2. 「なはミライアカデミー」の再開と親子協働プログラムの導入      昨年度に実施し、非認知能力の育成機会として高い評価を得た探究型プログラム「なはミライアカデミー」(小学4年生～中学生対象)を次年度以降に再開し、本事業の知見を取り入れた形でのアップデートを予定している。今回の保護者アンケートで得られた「親子で一緒に行えるワークも欲しかった」という要望に応え、アカデミーの中に「親子での対話や協働」を促すパートを組み込んだり、一部の回を親子で参加できる形式にすることを検討している。これにより、子ども主体の探究活動と家庭内での学びの循環を連動させ、保護者が子どもの学びに寄り添い成長を共有できる機会を創出する。</p> <p>将来的には、こうした取り組みを那覇市をはじめとする各地域の教育施策や地域づくりの取り組みと連携させながら、家庭・学校・地域が三位一体となって子どもを育てる、地域に根ざした持続可能な学びと「協育」のモデルとして発展させていきたいと考えている。</p>
-----------------------	--

7  
実施した事業  
全体への自己  
評価とその理  
由

①自己評価(5段階評価)

当てはまるところに○をつけてください。

	と て も 良 か っ た	良 か っ た	ま あ ま あ 良 か っ た	少 し 良 か っ た	全 く 良 く な か っ た
	5	4	3	2	1
1 課題設定は良かったか	<input checked="" type="radio"/>				
2 解決策として良い手法だったか	<input checked="" type="radio"/>				
3 自団体の実施体制は良かったか	<input checked="" type="radio"/>				
4 他団体との協働体制は良かったか			<input checked="" type="radio"/>		
5 対象者への周知は良かったか			<input checked="" type="radio"/>		

②上記の結果となった理由について

1. 課題設定は良かったか (評価：5)

予測困難な時代背景において、子どもたちが自ら考え行動する力（非認知能力）を育むこと、そしてそれを支える保護者の意識変容と家庭内での対話の機会が不足しているという課題設定は、現代の教育的ニーズを的確に捉えたものだった。那覇市が掲げる「次世代の未来を拓く力」の育成や不登校予防という地域課題へのアプローチとしても、非常に意義のある設定だった。

2. 解決策として良い手法だったか (評価：5)

「親子が同じ時間・別の場所で学び、家庭でその学びを共有する」という本事業のワークショップ手法は非常に有効だった。子どもたちは未来をテーマにした工作や発表を通じて主体性や創造力を発揮し、保護者は講演を通じて「非認知能力の重要性」や「問いのデザイン」といった家庭での新しい関わり方を学んだ。結果として参加者の満足度は学生100%、保護者94%と極めて高く、確かな意識変容を促すことができたため「5」と評価した。

3. 自団体の実施体制は良かったか (評価：5)

講師および運営スタッフが、子どもたち一人ひとりのペースに合わせ、発言やアイデアを否定しない「心理的安全性の高い場」を作れたことが大きな成果に繋がった。保護者アンケートでも「否定せず無理なく進行していただけた」「ポジティブな言葉で進めていて素敵だった」とファシリテーション能力が高く評価されており、企画から運営まで質の高いプログラムを提供できる体制が整っていた。

	<p>4. 他団体との協働体制は良かったか（評価：3）  なは市民活動支援センターをはじめ、教育委員会、PTA連合会、公民館など、多様な関係機関と連携し、チラシの配布や情報提供の協力を得られた点は大きな成果だった。一方で、今後は広報協力にとどまらず、連携団体からの具体的な参加者推薦や、共にプログラムを運営するような、さらに踏み込んだ「協働」に発展させる余地があると感じたため、評価を3とした。</p> <p>5. 対象者への周知は良かったか（評価：3）  対象学年へのチラシ配布や関係団体への設置、SNS広告など、多様な手法で広く情報発信を行った。しかし、目標参加数（54組）に対して実績は24組（達成度44%）にとどまった。保護者アンケートで「チラシからワークショップの目的や出口がイメージしにくかった」との指摘があったように、「非認知能力の育成」という目に見えにくいテーマの魅力を、ターゲット層に直感的に伝えるメッセージの工夫に課題を残したため3と評価した。</p>
<p>8  市への要望・  欲しい支援等</p>	<p>なは市民活動支援事業に係る下記の項目に対して  （①事業説明会 ②個別相談 ③募集期間 ④広報支援 ⑤オープンデータ等）  特になし</p>